

## 意識の本質をどこに置くか

—— 汎心論的眺望と意識の進化 ——

伊 藤 春 樹

### 序

意識はそれがどのようなものであるか誰でも知っている。それゆえ、「意識ってなに」と訊ねることはない。この問いは「意識」という言葉の意味を訊ねているからだ。ありうるのは、意識の本質を訊ねる「意識とは何か」という問いである。意識は、あまりに身近であるために、その本質を把握することが極めて困難なそういう難問の典型だろう。

その難問には様々な解答が提案されている。意識は時間であるとか、意識は統覚であるとか、意識は自己意識であるとか、意識は他在における自己内還帰であるとか、意識はそれ自身へと関係する関係であるとか、意識は志向性であるとか、意識は持続であるとか、意識は無であるとか、意識は対自であるとか、意識は自己言及性であるとか、意識は気づきであるとか。これらはすべて、意識が持っている現象性の本質を言いあてようとした苦肉の策で

意識の本質をどこに置くか

ある。たしかにこれらの規定は、どれも意識がもっている特徴をそれなりに言い当てている。しかしこれらはどれも、意識の本質規定ではない。意識が持っている本質的と思われる属性を印象批評風に描写しているにすぎない。意識の本質は、これらの規定をすべてそこから導出できるものでなければならぬ。

では、意識の本質はどこに置くべきか。意識、わけてもクオリア体験は神経細胞の興奮以外のなものでもない。要するに、身体の興奮状態である。意識の本質が脳を枢要な一部とする身体における活性化であるならば、これは唯物論が正しかったということになるのだが、どうもそうとばかりは言えないようだ。意識について伝統的な唯物論の主張とここでの主張はどがちがうのか。伝統的な唯物論者の根本的間違いは、物質性と客観性とを絶望的なまでに混同ないし同一視しているところにある。ただこの一点で小論の唯物論はかれらのそれと決定的に異なったものとなる。

## 一 意識論の惨状

現在、意識論は惨憺たるありさまだ。この惨状は、みるところいくつもの判断ミスが重なった結果である。まずその最大の原因は、クオリアに固有の存在を認めそこなった物理主義的一元論にある。二元論など一顧だにしない物理主義者の尊大で一徹な客観主義的態度がまずもって最大のミスである。次に重大なミスは、物理主義的一元論を避けようとする側が根拠もなく機能主義にすがりついたところにある。おそらく、つぎのような暗黙の推論が働いたのだろう。「意識はこころの働きだ。こころについてまともな理論は機能主義しかない。だから意識の問題も機能主義で片付けるほかない」と。たしかに、いわゆる心理現象のなかには機能主義に格好のものもある。記憶と

か認知とか判断とか意志とかだ。しかし、ここらなるひとつの実体が存在するという保証はどこにもないのだから、機能主義があてはまる現象があるからといって、意識もその同じころの機能だとすることに根拠がない。三つ目の重大なミスは、機能主義を批判する側が、クオリアの不在だの反転だのゾンビだのとガラクタがあげる騒音にまぎれてクオリア実在論を許してしまったことである。要するに、機能主義的還元論に対するアンチテーゼとして、安易に実体二元論を認めてしまったのだ。

物理主義的一元論は意識に固有の存在を認めることができないから意識論としては無力である。最後に触れるつもりだが、意識の存在をみとめない限りどのように脳の働きを説明したところでそれは意識論たりえない。意識は機能に還元できないのだから機能主義的還元論に出る幕はない。実体二元論は意識に固有の存在を認めるものの、実在論をとるがゆえに意識は超越論哲学の問題として扱うほかなく、具体的な説明は望むべくもない。

この惨状から抜け出すには、まず意識に固有の存在を認めることだ。そのためにはある種の二元論を認めるべきである。実体二元論は今日の混沌の元凶のひとつだとしても、なんらかのかたちで二元論を採って意識に固有の存在を認めてしまえば、意識はどのように生じるかという発生の問題からは解放される。現象的存在である意識は、究極的なものとしてあるわけだから、その発生を問うことなど原理的に不可能だろう。これが三元論をとるひとつの利点である。つまり今日の不毛な議論のひとつであるチャルマーズのハード・プロブレムから解放される。しかし意識の存在を最初からみとめるのでは意識をすこしも説明したことにならないとの不満の声が聞こえてきそうだ。たしかに、何も説明していないと言われればそうかもしれない。しかし、意識を説明するとは何をすることなのか。意識を志向性だの表象性だのに還元して意識のいったいなにがわかったというのか。その意味では還元主義も結局なにも説明できていないのだ。

## 二 意識は認識ではない

これ以外にも問題なのは、意識現象を気づきというような認識の一種として位置づけたことである。たしかに意識現象には多くの場合、気づくという側面がある。しかし気づきを認知の一種として解釈したうえで、それを意識の本質とみなすのはきわめてミスリーディングである。あるいは、意識の現象性を、志向性とか表象性というような意味論的・認識論的機能に還元できると考えた点である。これらのミスはとくに今に限ったことではない。ある意味で近代哲学に固有のミスである。つまりこの一連のミステイクのおかげで超越論哲学は今日まで生き延びているのだ。

意識は、認識に素材を提供しはするものの、それ自体としてみればいささかも認識ではない。痛みのような感覚体験は、それ自体としてみれば、認識ではない。痛みの体験は痛みを認識することではない。認識が成立するためには、認識される対象が客観的に存在していなければならぬ。そして認識には誤認が原理的に可能でなければならぬ。痛み体験については、そのいずれも成立しない。色や音や味や匂いや手触りについてのクオリア体験も同様である。色のクオリアを体験するのは色を認識することではない。これは、意識のすべてに言いうることだ。視覚像が彷彿するようなイメージ体験は、ある意味で意識体験のひとつの典型であるが、その場合に、そのイメージを認識しているわけではない。それが認識であれば、単なる妄想や幻覚も認識だということになるだろう。人間の意識体験においてこのほか重要な言語的意識の場合もそうである。意識を認識とみなす大きなよりどころが、言語に媒介されたいわゆる思考であるが、内語 (inner speech 内言) のような言語的意識でさえも、それ自体は認識ではない。内語がそれ自体すでに認識だとなると、ちょっとした思い付きもとりのめない独り言も、すべて

真正の認識になるだろう。

このように、意識体験は、それ自体としてみれば、いずれも認識ではない。それゆえ、認識に固有の特徴を把握するための概念によって意識の本質を規定しようとするのはすべて誤解のもとだといわざるをえない。それはたとえば、志向性であり、開示性である。また意識において対象が「現出する」だの「立ち現われる」だのと描写するのも間違いの元である。意識体験を真理を覗く窓のように考えるのも、また意識を、認識を成立させる透明な媒体のようにイメージするのも、すべてメタファーにすぎない。

認識にとって意識が不可欠の要因であることはまちがいない。しかしこれは、その本質が志向性であったり開示性であったり気づきであったりというように、意識が認識論的な機能をはたしているからではない。日常生活において意識体験を、例えば志向性として、あるいは開示性として、気づきとして利用しているということである。

### 三 意識体験は身体の興奮状態である

認識ではないとすれば、意識の本質は何か。ここでは意識体験を神経細胞の活性化と考えたい。すなわち脳を中心とする身体の興奮状態である。これが意識の本質である。わたしたちが、主観性の成立であるとか対象の「立ち現われ」というように描写している事態は、神経細胞の興奮以外のなものでもない。このひとつの事態を、様々な概念を用いて規定し、多様なことばを駆使して記述しているのである。

このように、小論は、意識について心脳同一説を採る。同一説的物理主義である。では、意識が神経細胞の興奮状態であることはどのように示されるのか、と問われるならば、さしあたり、それは小論の根本前提であると答え

意識の本質をどこに置くか

るしかない。それを完璧に証明する決定的議論など存在しない。しかし、だからといって、それを信仰告白のつもりで口にしてはいるわけではない。小論が採択する同一說的物理主義がどのような内容のものなのか以下での説明を通じて、同一説を採択する間接的な論拠を提示しうるだけである。

意識体験は、神経細胞というケミカル・マシンの活性化にはかならない。痛みも想起も内語もその正体は神経細胞の興奮状態である。意識体験がそれ自体で持っている特徴はすべてここに発する。主観性も内面性も私秘性も現象性も。

意識の本質は脳を典型とする身体の興奮状態だとするこの解答には、不満の向きも多かるう。しかし、意識のよ  
うに、誰もがそれを生きることによってそれがどういふものであるかわかっているそういうものについて、それ以上何を語れというのだろうか。小論の冒頭で紹介した様々な意識の本質規定は、ひとつの例外もなく、機能としての定義である。しかし、その同じ機能をはたしていても、実際に生きられるのでなければそれは意識ではない。意識は主観的なのだ。それをみずから体験することによってしか存在しないそういうものである。つまり、自分の身体、わけても脳が興奮することによってしか成立しないのである。意識は否応もなく主観的であり、避けがたく一人称的であり、逃れがたく現象的なのだ。そして、それがどういふものか誰もが知っている。だから、意識の本質は、意識体験において各人が生きているまさにそれなのだ。意識の本質は身体の興奮状態という規定は、そういう意味である。脳という物体の客観的機能としての興奮状態ではなく、脳という物体の主観的体験としての興奮状態である。

#### 四 意識の存在論的身分

意識はすべて各人の意識体験において成立する。それゆえ、意識の存在について實在論は採れない。意識はすべて脳を中心とする身体の状態に依存しているからである。つまり自立的には存在していない。しかし、意識を脳の物質状態が持つ客観的性質に還元することはできない。また、志向性や表象性に還元することもできない。つまり、意識は独自の存在なのだ。一方、意識のうちには観念のように自律性の強いものもあればクオリアのように自律性を持たないものもある。それゆえ、クオリアは、自立的に存在していないのみならず自律的にも存在しない。デカルト主義は、意識を自立的に存在する自律的なものと考え、意識は實在論的にそれ自体で存在するとみなされている。デカルト的二元論とはまさに二重實在論なのだ。超越論哲学は、この意味でデカルト主義の一形態である。意識は本質的に主観的なものであり、内密なものであり、現出するものである。それゆえ、意識を客観的なものへ還元することは根本的にまちがっている。——しかし、そのように断定してしまうと、意識を説明したり説明することはもはやできなくなるだろう。そもそも説明とか説明は、客観的に説明し客観的に説明することなのだから、なんらかのかたちで客観性を担保できなければ、説明にも説明にもならない。意識を客観的なものとして規定しようとする人々は、意識が主観的であることを知らないわけではないし、また意識が現出するものであることを頭から否定しているのでもない。けれども、意識は主観的だと言っただけではすこしも説明にならない。説明にならない。だから、無理を承知で、あえて客観的な側面をなんとか確保しようとしているのだ。——この主張は正当だとおもう。だからと言って意識の存在論的身分を見失ってはならない。意識をどのように探究するかという方法論の問題と意識はどのように存在するかという存在論の問題は別なのだ。

意識の本質をどこに置くか

物理主義を採りながら意識をあくまで主観的なものとして確保しようとする小論のような立場は破綻しているともなされがちだ。そこには同一性を巡る周知のアポリアがある。クリプキによれば、同一性は必然性を伴っており、AとBが同一であるならば、Aについて言えることはすべてBについても言えなければならず、逆にBについても言えることはかならずAについても言えなければならない。それゆえ、意識体験は主観的であると言えらば、神経細胞の興奮も主観的であると言えなければならず、逆に、神経細胞の興奮が一種のイオン反応であるならば、意識体験も一種のイオン反応である。しかし、ニューロンの活性化を主観的と呼ぶのは背理であらうし、意識体験をイオン反応とみなすのは滑稽だろう。だから、意識を脳の神経細胞の活性化と同一視するのは間違っている。――

このように批判する人たちは、脳を徹頭徹尾客観的物质とみなしており、そこには主観性の気配すらないと考えているようだ。脳が一種のケミカル・マシーンであることは疑いない。しかし、だからといって、そこには主観性の余地などないとなぜ言えるのか。脳というケミカル・マシンは、主観性を生成しないとなぜ断言できるのか。意識はケミカル・マシーンによっては生成されないとなぜ言えるのか。もちろん、生成されるといっても、文字通り、脳内における化学反応によってノルアドレナリンやドーパミンのような化学物質が生成されるように、意識が生成されるわけではない。しかし、脳というケミカル・マシンの活性化が主観性の成立であることを、なぜ最初から、認めようとししないのか。ここには、物質は徹頭徹尾客観的だとするドグマがある。デカルトの負の遺産だ。

## 五 デカルトの負の遺産

なぜ物理主義者は意識を消去したり還元したりしようとするのか。それは、現象性という主観的なものの存在を



脳という物質過程に認めることができなからだ。意識を巡る惨状は、主観性や現象性を身体現象とみなすことができないところからくる。身体現象は客観的な性質に限られると暗黙のうちに根拠なく自己規制してしまっているのだ。身体には客観的なものしかないとするドグマである。身体を延長実体とみなしているわけだ。まさにデカルトの亡霊である。主観的な性質は客観的な性質とは相容れないというまっとうな考えと、主観的な性質は物質の性質ではないという間違った信念とがデカルトの権威のもとで癒着し一体化してしまっている。

デカルトの場合、たとえば、自分が物体（身体 corpus）ではないことの証明は『第六省察』で次のように与えられている。私は、思惟実体と延長実体がそれぞれどういうものであって、しかもそれらがまったく異なったものであることを知っている。物体とはただ延長するものであって思惟するものではない。私が思惟しているとき、私は自分が思惟実体であることがわかる。それゆえ延長実体ではないことがわかる。ゆえに、思惟するものとしての私は延長実体、すなわち物体ではない。——これがデカルトの「証明」である。ここでは、「私が思惟しているとき、私は思惟実体である」という暗黙の前提が用いられている。そもそも、私が思惟しているとき私にわかるのは、私が思惟していることだけだろう。私がどういう実体であるかはわからないはずだ。ホプブズの批判はこの点をついている。そしてまた、私が思惟していることから、それゆえ私は物体ではないという結論をみちびくことができるのは、物体は延長実体であって思惟するものではないからだ。物体は延長実体であって思惟しない。私が思惟する限り私は物体ではない。——これが、物体から主観性を奪い、私から物質性を奪う究極の論拠である。

デカルトの二分法によれば、存在するのは思惟実体か延長実体である。思惟実体とは延長を持たずもっぱら思惟するものであり、延長実体とは思惟することなくもっぱら延長するだけのものである。ここまではよい。問題は、その逆である。思惟するものは思惟実体であり、延長するものは延長実体であるとなぜ言えるのか。なるほど私は

思惟する。しかしそのことから私が思惟実体であるとの結論は導けないはずだ。それを導くには、「私は思惟する。ゆえに私は思惟である。ゆえに私は思惟実体である」という推論を援用する必要があるだろう。まさにホッブズが指摘した点である。ホッブズは、「私は思惟する、ゆえに私は思惟である」という暗黙の前提をデカルトが持ち込んでいると批判していたのだ。物体の場合も同様であって、延長実体は思惟しないにしても、しかしだからといって物体は思惟しないとなぜ言えるのか。どこかで物体は延長実体であるという前提をもちこまなければならぬ。すなわち、「物体は延長する。ゆえに物体は延長である。ゆえに物体は延長実体である」と。思惟実体と延長実体からなるデカルトの二元論は、元来、物体ないし身体が思惟と延長の両方をもつことを排除しないはずだ。デカルトにおける心身問題を思惟実体と延長実体との相互因果関係というように理解するとほとんど絶望的だけでも、松果腺をニューロンと読み替え、動物精気を神経インパルスと読み換えれば、デカルトが言いたかったことはそのまま今日でも通用する。だからデカルトの枠組みは、身体（物体）が思惟と延長の両者をそなえていることを認めるようになっていくはずだ。とくに脳の場合にそうでなければ、動物精気と松果腺の議論は、通俗的な批判が言うようにまったくのナンセンスだろう。しかしながら、一方でデカルトは身体を単なる機械とみなして、そこに主観性の入り込む余地はない。残念ながらデカルトに、「機械は思惟する」というような革命的発想を期待するのは無理なようだ。

クオリアは主観的なものであるから物質の客観的状态に還元できない。これは認めてよい。ほとんど論理的必然性だ。しかし、だからといってクオリアは物質がもつ性質ではないとはならない。クオリアは主観的なものだから物質の性質であるはずがないという判断は、物質的なものは主観性をもたないと前提してしまっている。物質は徹頭徹尾客観的だと無反省に思い込んでいる。

そういうわけで物理主義者は、意識のような主観的なものの存在を認めたくない。そのために、なんとか意識を客観的性質に還元しようとする。還元主義的物理主義である。逆に超越論哲学者は、意識に固有の存在を認めればそれだけで超越論的なものを確保したことになると思い込む。どちらも間違っている。意識を客観的な性質に還元することなど出来ようはずがない。しかしながら、意識の存在を認めたらと言って、超越論的主観性のような認識エンジンを保証されたことにはならない。物理主義者も超越論哲学者も、意識の存在性格を見誤っていると言わざるをえない。すなわち、意識の存在を認めたからと言って超越論的存在を認めたことにはならないし、脳という物質的なものが意識体験を可能にするからといって、客観的性質が主観的な性質を構成すると主張できるわけではない。脳は真正銘の物理的システムである。そして、それが活動することによって主観的な意識を可能にするのだ。

## 六 客観主義的ドグマ

今日の意識論の混迷の源には、物質は徹頭徹尾客観的だとするドグマがある。悪しき物理主義だ。この悪しき唯物論は、物質を客観的な性質に還元し尽くすことができると思解しているようだ。そもそも、人間は物質にすぎないではないか。しかも、この物質には主観性がある。つまり、主観性を持つ物質がすでにすくなくともひとつは存在しているのである。そうであれば、脳という徹頭徹尾物質的なシステムが主観性を胚胎する可能性を最初から排除することには根拠がないだろう。物理主義は物質的と客観的とを最初から混同ないし同一視している。

混同の原因の一半は、「物理的 (physical)」という言葉の二義性にあるだろう。「物理的」が「物理科学的に説明できる (explainable in the theories of physical sciences)」の意味であるならば、これは「客観的 (objective)」

意識の本質をどこに置くか

に等しい。それにしたいて、「物理的」が「物質的 (material)」を意味するのであれば、人間は物質にすぎないという意味で、物理的なものに意識が宿ることは実際あるわけだ。この同一視の背景には、matter は主観性 (生命) を持たないとするアリストテレス的な質料の考えがあいかわらず生きていてという面もあるだろう。

脳という物質過程は、意識体験を生じることができる。それゆえ、意識が主観的であるならば、当然ながら脳という物質も主観的である。ニューロンの発火がイオン反応であるならば、当然、意識体験はイオン反応である。先に、ニューロンの活性化を主観的と呼ぶのは背理であり、意識体験をイオン反応とみなすのは滑稽だと述べたが、実は、背理でも滑稽でもない。それが真実なのである。意識において心脳同一説は正しいのだ。むしろ意識においてこそ心脳同一説は正しいと言うべきだろう。繰り返すが、「物質は客観的であって、そこに主観性は存在しない」という思い込みは錯覚にすぎない。しかも重大な錯覚である。意識について考えようとする者の脳を金縛りにするからだ。神経細胞におけるイオン反応は主観的現象でもあるのだ。

脳という物体は客観的性質とやらんで主観的性質を持つ。こう言うと、脳は延長実体と思维実体の両者からなる主張しているように聞こえるかもしれない。そして、脳がもつ主観性は思维実体の働きであり、客観性は延長実体の性質であると。そうであれば結局、意識は、脳のなかに住まう魂の働きであるとか、超越論的主観性の能作であるというような話になるだろう。完全な二元論だ。これでは、客観主義的ドグマを避けるために実体二元論 (二重実在論) という更に由々しきドグマに逃げ込んだと指摘されてもいたしかたあるまい。しかし、そうではない。客観主義的ドグマを避けるからと言って、魂のような実体の存在を認めるわけではない。脳という物体の興奮状態を駆動しているのは、あくまでも客観的に探究可能な化学反応である。この意味で、脳はケミカル・マシーンなのだ。脳をケミカル・マシーンとみなすとは、脳の活動原理を 100% 客観的に解明可能とみるにはほかならない。

そしてこのケミカル・マシンが活動状態にあるとき主観的体験が実現する。その主観性は、独立にそれ自体として客観的に存在しているわけではない。それはあくまでマシンの活動によって可能になる。脳というケミカル・マシンが活動状態にあること、それが主観性の成立である。脳という物体は、それが活動状態にある限り、このように主観的でもあるわけだ。結局、客観主義的ドグマは、活動状態にある脳がもつ特殊性を没却した見方なのである。生きている人間をゾンビ（死体）とみなしているわけだ。客観主義的ドグマにふさわしい脳といえば、それは死んだ人間の脳、まさにゾンビ脳だ。

客観的な物質の客観的に解明可能な活動であっても、その活動はその物質自体からみれば主観的だろう。神経細胞の活性化が主観性の成立なのは、それがその神経細胞にとってのことだからである。とすると、例えば、電球のフィラメントが白熱することも、そのフィラメント自身にとっては主観性の成立なのではないか。そこにはなんらかのクオリア体験が成立しているのではないかということになる。つまり、物質の活性化はその物質にとっては主観的な体験なのだ。そうであれば、あらゆる活性化が、それどころかあらゆる物質が主観性を実現していることになる。汎心論 (panpsychism) だ。

このようなアナキーとも言うべき汎心論の嵐を避けるには、シナプス回路のようなある種の統合度を実現している物質だけが意識といえる水準を実現できると考える。あるいはそこに四〇ヘルツ振動 (40-Hz oscillations) がある場合に限られると。つまりある種のオーケストレーションを必要としているのだと。意識とは、このオーケストレーションのことなのだ。いずれにせよ、ここまでくると、もはや哲学の問題ではない。神経科学とそこににおける仮説形成の問題になる。しかしこれは、むしろ喜ぶべきことだろう。意識の自然化の果てにたどりついた境地なのだから。

意識の本質をどこに置くか

## 七 汎心論的眺望と意識の進化

ある種の蛾はコウモリが発する特定の周波数の音にたいして選択的に反応する。空中を浮遊していてコウモリが出すソナーを感知すると、この蛾は直ちに地上に落下し、コウモリによる捕食を免れる。この蛾の聴覚はたった一本の神経細胞からなっている。さてでは、このたった一本の神経細胞が興奮状態にあるとき、当の蛾は意識を感じているのだろうか。複雑に統御され言語に媒介された人間の高度な意識には比すべくもないが、ここには意識体験が成立しているとみるべきだろう。プリミティブな意識体験である。プリミティブであってもその蛾にとっては、まさに死命を制する決定的な体験だろう。そのとき、その蛾は、「ソナー・クオリアに圧倒されて昏倒してしまふ」と描写するのが適切であるような、そういう主観的体験を生きているにちがいない。意識を失って地上に落下したのだと。このような描写はあまりに擬人的すぎて比喩の域を出ないとの批判はあろう。しかし重要なのは、人間の意識をこのような原始的な意識からの連続的進化の下に位置づけること。そして、そうであれば、そのような描写が妥当しなくなる境界線を進化の系統樹の上で明確に引くことは難しいということ。これらは認めるべきだろう。

このように考えるならば、神経細胞が存在するところには意識体験が成立しているとみるべきだろう。では、神経細胞以外の細胞においてはどうかなのか。生命体以前の有機物質ではどうかなのか。これらの問いは必ずしも哲学的問いではないが、意識をめぐる哲学的考察が惹起する問いである。要するに、意識にたいして汎心論的眺望を拓くべきなのだ。

汎心論を採るといっても、その辺にころがっている石ころや風や波にも意識はあると主張するわけではない。ある種の興奮状態を実現できる物理的システムには、未進化であっても意識状態を想定できるということである。興

奮状態という様相をもつ物質的システムには意識が成立する可能性がある。ようするに、意識はすでに自然のなかにあると考えるのである。それが進化の果てに人間の意識状態を形成するまでに至ったのだと。これは驚くべき考えであって、近代人にはことのほか信じがたい。

一般にわたしたちは、意識ほど物質から遠いものはないと思っっている。意識が、わたしたちの身体の物質性から来るなどとも信じられない。しかし、物理主義を採りながら還元主義は認めず、実体二元論も採らず、同一説を採って、しかも意識の独自存在を認めようとするならば、それ以外に考えようがないだろう。

採るべきなのはあくまで汎心論的眺望であって、汎心論そのものではない。必要なのは、物質過程のなかに主観性が成立している様を認めることである。これはすなわち、物質が活性状態にあるとき、その活性化を自己の内面性として享受しているかのようにみなしうる主観性を仮構できるのは、その活性状態がどのような物質過程である場合なのか見届けることである。言い換えれば、物質の興奮状態を自己性の発現であるかのようにうけとることができるのはどういう場合か。

ある自然現象が意識体験たりうるのは、その自然現象を生きる主観がすでに存在するからではない。そのように考えるのが主観主義的ドグマであり、ホムンクルス神話なのだ。そのような主観など、魂なる実体が存在しないのと同様どこにも存在しない。存在するのはただひとつ、物質の興奮状態、すなわちある種の活性化だけである。そして、ある種の物質的装置におけるある種の状態が、体験という状態を可能にし、主観性という境位を成立させるのだ。では、どういう物質的装置のどういう物質状態なら主観性の成立とみなせるのか。

## 八 体験の成立と身体

わたしの神経細胞が興奮するとわたしは痛みを感じる。神経細胞というケミカル・マシンの発火がなぜ意識体験を可能にするのか。それがわたしの身体の一部だからだ。わたしの神経細胞の発火は、まさに、わたしの興奮状態なのだ。これはたんなるレトリックではない。ここに意識の本質がある。意識はそれ自体としてみれば、物質のひとつの状態に過ぎない。それが意識体験であるのは、その物質が、たとえばわたしの身体の一部であり、わたしを構成しているからである。神経細胞のような構成要素の集合体としてわたしというひとつのシステムが成立している。このシステムは、ひとつの卵細胞から発生したひとつの有機体である。しかしこれは、〈わたし〉なる特殊にして特権的な何か (something) が存在するということではない。だから、太郎の身体でも花子の身体でも、あるいはポチやタマの身体でもいいのだ。

時として意識は、窓のように、あるいは透明な媒質のようにイメージされるが、これは、眠っているのではないかぎり、とぎれることなく背景のように覚醒状態が続いているからだ。この背景のように息づいている意識はほとんど気づかれることがない。この背景としての意識、覚醒レベルとしての意識は、身体の神経細胞がそれぞれ固有に活動することによって、その全体が総和として発するものである。一種の低音(?)ノイズだ。これに対して眠りとは、個々の神経細胞が固有の活動に専念することをやめて、全体が同じリズムで揺曳している状態だ。背景意識の存在は、ニューロンが生きて活動している証である。それゆえ、この水準における意識の喪失は、細胞としては生きていなくても生体としては死を意味する。ヒトとしての、あるいはイヌとしてのあるいはネコとしての死とは、背景意識がなくなることだ。いずれにせよニューロンはそれが発火するかぎり意識を産出しているのである。



この背景意識にたいして、勝義における意識 (consciousness per se) すなわちクオリア体験は、ある一群のニューロンがなんらかのかたちでニューロン体系全体を代表している状態である。一群のニューロンの発火が全体を代表するかのよう突出するとき、その一群のニューロンの発火はクオリア体験として前景化する。まさに立ち現われるのだ。クオリア体験とはある一群のニューロンの自己表出 (self-manifestation) である。

ニューロンの発火がその生体を代表するとは、図式化して言えば例えば次のような場合である。ある一群のニューロンの発火が、それ以外の全てのニューロンの発火の結果として生じる場合である。あるいは、ある一群のニューロンの発火が、その一群のニューロンの発火を強化し、それ以外の全てのニューロンの発火を抑制する場合である。あるいは、ある一群のニューロンだけが発火し、それ以外の全てのニューロンは睡眠状態にある場合である。あるいは、ある一群のニューロンの発火が際立って持続的なために、それ以外の全てのニューロンの発火を方向付ける場合である。

ある一群の神経細胞の興奮状態は、ある閾値をこえると神経細胞全体を、それゆえ生体全体を代表するかのよう突出してくる。これがクオリア体験だ。自己表出する一群の神経細胞は、まさにその生命体の自己そのものなのだ。全体を代表するものは、基本的にそのつどひとつしかない。意識がそのつど単独的に現出するのはこれゆえである。

反射がほとんど意識されないのは、反射に参画しているニューロンの数が少なく発火の期間も短く、しかも直ちに完遂して余韻を残さないからである。平衡感覚も、それが正常に機能している限りはそうである。自律神経系の活動が総じて意識に登りにくいのは同じような理由からだろう。これに対して、痛みが鮮烈なクオリア体験として生起するのは、それに参与するニューロンの数も、また個々のニューロンにおけるスパイクの数も多く、興奮状

態も長時間持続し、さらにニューロン体系全体のなかでいつまでも余波が収まらないからであろう。味覚、聴覚、嗅覚の場合もそうだろう。

ニューロンはそれ自体で意識を生じるのであるが、それが有機的全体を構成しない限り、主観的体験にはならない。主観的体験が生じるのは、ニューロンが集まってひとつの身体を有機的に構成しているからである。その結果、どのニューロンが発火しても、その神経細胞の興奮はその身体の興奮となる。すなわち、自己性の表明である。これが意識という主観的体験が可能になる究極の根拠だ。それゆえ、有機的全体という体制をもたない単なる物体に意識体験は成立しない。意識は身体にしかやどらない。

以上のような議論に対しては次のような批判が予想される。身体すなわち生命体に、ある種の自己性があることは認めてもよい。しかし、そのような自己性があるからといって、だから主観的体験が可能になるとは十分に証明されない。それ故、意識体験が身体においてのみ生起するという議論は根拠薄弱だ。――

主観性に対して機能から接近する議論は、どのように展開しても決して十全とはなりえない。「説明上のギャップ (explanatory gap)」と言って、詰め切れない部分が残るのだ。だから、そのような批判が出されることは、ある意味で十分予想される。しかし、逆に問いたい。そのように批判する御仁は、おのれのクオリア体験の成立根拠をどこに置くつもりか、と。主観主義的ドグマに陥ることも汎心論を採ることも避けるとすれば、自分が意識体験を生きている現実をどのように説明するのか。身体の自己表出にそれを求めないとしたら、結局、「意識は謎だ」と言って終わるしかないだろう。必要なのは謎を吹き払うことだ。ギャップを見るとすぐに「謎だ！ 神秘だ！」と騒ぎたてるのはやめるべきだろう。あくまで必要なのは、意識体験をどこに位置づけるかなのである。

大気の状態が不安定になると広い範囲で乱流が生じる。すると静電気が発生して、あちこちに放電現象が起きる。

雷だ。このとき、「大気は興奮状態にある」と語るのはいかまわぬ。しかしこれを「大気は激怒している」とか「大気は歓喜にうちふるえている」と描写するのは脚色がすぎよう。なぜなら、そのような大気中の放電現象を生きたる主体が想定できないからだ。こう言ったからといって、そこには認識主体や主観性が存在しないからだというように理解、すなわち誤解してはならない。そのように誤解するのが主観主義的ドグマ、すなわちホームンクルス神話である。雷をクオリア体験とみなせないのは、大気における放電現象を生きたるシステムが成立していないからだ。そこには大気という物体はあるが身体はない。

それゆえ、雷を生きたる身体が想定できるならば、雷をクオリア体験とみなすことも可能だろう。結局、大気の興奮状態はクオリア体験たりえないが、それはクオリアなる摩訶不思議なものがそこには生じていないからではなく、また、その摩訶不思議なクオリアを感じ取る認識主体が存在しないからでもない。そうではなく、その放電を自己の身体現象として放電する物体、すなわち身体が存在しないからである。

白熱電球が白熱し光を発しているとき、この場合もまた、それをひとつの興奮状態とみなすのはかまわぬ。しかしそこにクオリア体験が成立しているときとみることは難しい。白熱電球には身体を認めたいからだ。身体は一つの受精卵から成長したものであって、いわば自生したものである。誰かが造ったわけではない。そしてまた生きた身体はそれ自身ひとつのまとまりをもっている。有機体と呼ばれる所以である。その意味で、生きた身体は最初から自己性を担っている。これにたいして、白熱電球は人間が作ったものであって、そこに自己性などない。電球のような物体をひとつの物体としてまとめあげているのは、それがたまたま増集したり凝集したのではないならば、その物体の製作者だ。白熱電球は、ガラス玉と口金とタングステン線をかき集めて誰かが組み立てた人為的装置である。白熱電球には、それがいくら興奮してもそれによって実現される自己などそもそも最初から存在しないのだ。

それゆえ、その白熱電球をロボットに組み込んだとしても、意識体験は成立しない。ロボットには白熱電球を自分の有機的構成要素として統率する身体がないからだ。そのロボットをそのロボットたらしめているのは、すなわち、そのロボットにロボットとしての同一性ないし自己性を与えているのは、これもまた製作者の意図である。

## 九 隠れ汎心論

電球のフィラメントが白熱してもそこに生命活動はない。フィラメントは物体ではあるが身体ではない。しかしこう言うときのように反論されよう。フィラメントが白熱しているとき、その白熱状態は、そのフィラメントから見ればそれ自身の活動であって、自己性の発現なのではないか。そうであれば、そのフィラメント自身は主観的体験を生きているのではないか。——このような反論は、そのように考える本人が自覚しているか否かは別にして、実は正真正銘の汎心論である。自覚していない場合が多いから、「隠れ汎心論 (disguised pansychism)」と呼ぶべきであろうが、この反論は汎心論と同じ欠陥を露呈している。問題は、白熱電球ないしタングステン線に自己性を認める根拠だ。「フィラメントが白熱状態にあるとき、その白熱状態はフィラメント自身から見ればそれ自身の活動である」と言われるが、「フィラメント自身から見ると」とされる「自身」の内実は何によって保証されるのか。たしかにタングステン線も、ひとつふたつと数えられるという点では個体である。その意味でならば、そこには個性もあるし自己性もある。唯一性もある。しかし、それ以上ではないだろう。そのタングステン線について「フィラメントから見れば、その白熱化は、それ自身の活動だ」と語られるとき、それはただ、「タングステン線が白熱している」と言っているにすぎない。それ以上のことを言おうとすれば、そのタングステン線にはすでに自我や主

観性があるとか、こころや魂があるとしなければならぬ。これはまぎれもなく汎心論である。小論のような考え方にたいして、「タングステン線だって意識はありうる」と反論する人は、おそらく物理主義的に考えるがゆえに反論しているのだろう。だから汎心論など決して認めていない。隠れ汎心論たる所以である。そうであればむしろ、フィラメントの興奮状態に自己は成立しない、フィラメントは、それがいかに白熱しようとクオリアを実感するころはない、と小論のように言うべきなのだ。

白熱電球の発光の場合にも、そこには有機的システムが存在していると考える立場もあるだろう。眼にはみえないが、そこには宇宙的身体があって、白熱電球の発光がその魂のはたらきであるようなそういう身体が存在しているのだと。まさしく汎心論だ。

小論のような立場に対しては、さらに次のような疑念がわくかもしれない。ニューロンの発火は純粋な電気化学的反応なのだから、それが誰のニューロンであるかは、発火すなわち意識体験の成立にとって無関係だろう。であれば意識と自己性とはそれぞれ独立の問題だろう、と。あるいは、自己性があるかどうかは、他者との対比の問題であって、当(人)にとってはどうでもよい、と。クオリア体験を生きている当(人)にとっては、自分に同一性があるかどうか、自己性があるかどうか、自分が誰であるかはどうでもよいはずだ。自己性が保証されているかどうかなど、発火にとってはどうでもよい。そうであれば、自己性が保証されていないから意識体験は成立しない、それは単なる自然発火にすぎないという考えは、全くの的外れなのではないか。――

このような疑念は、一見すると先の反論とは別物のように見えるが、おなじ間違いを犯している。自己性が成立していないのであれば、そこにはそもそも意識体験は成立しない。これは他との比較の話ではない。マシンが興奮状態にあるとき、それを生きている当(人)が存在しないのであれば、それは単なる自然現象であって意識体験

ではない。件の疑念は、自己性であろうとなかろうと、すなわち、身体であろうとなかろうと、そんなことは発火している当（人）にとってはどうでもよいと言う。たしかに、発火という電気化学的現象にとって自己性は関係ない。しかし、いま問題なのは、単なる発火現象ではなく、意識体験を実現するかぎりでの発火である。すなわち、クオリア体験を生きている当（人）における発火である。その当（人）は、わたしであろうと太郎であろうと、あるいはボチでもタマでもよいが、誰かでないならばならない。そこに自己性がなければ、「当（人）」にとってはどうでもよい」のその当（人）なるものはそもそも存在しない。だから、如上のように疑念を差し挟む人は、実は、当（人）をすでにひそかに前提しているのだ。つまりひそかに汎心論を採っていることになる。電気化学的現象でありさえすれば意識体験は成立すると考えているのだから。

叩いても机が痛さを感じないのは、机が誰の身体でも、ないしは何の身体でもないからだ。この場合も、「この机はこの机自身の身体なのだから、この机は痛さを感じている可能性がある」との反論がなされるかもしれない。汎心論者であれば、当然そのように言うだろう。このように、あらゆる物体はそれ自身の身体であるとみなすのも、汎心論の一種、すなわち汎身論（panmatism）だ。しかし、物体であればそれはすでに身体だとするのはドグマである。汎身論的ドグマだ。では、汎身論、もと汎心論はどこがわるいのか。

## 十 汎心論はどこがわるいのか

今日、汎心論は、存在論としてまともに取り上げるにあたいしない。そう断言してよい。だから汎心論を存在論として主張しようとする人々を信じることは到底できない。その理由は簡単だ。「こころ」のもとに何が考えられ

ているか判明ではないからだ。そもそもこころとはいったい何なのか、それを考えれば、汎心論などありえないのは明らかだろう。汎心論は、「こころ」が持っている多義性と謎をそのまま持ち越しており、なにひとつ解明も解決も解消もしない。現代のある汎心論者 (David Skrbina) は、それは汎心論がこころにかんするメタ理論だからであって、こころに関して具体的な解明をめざす理論ではないからだと説明している (*Panpsychism in the West*, MIT Press, 2005, p.249) が、強弁にすぎない。まさにこのことばこそ、かれらの迷妄を如実にしめす証左である。彼らの主張はこのようにほとんど無内容なのだ。だから汎心論は唯物論と対立するような存在論的立場ではありえない。

唯物論者が「存在するのはすべて物質だ」と主張するとき、物質とは何かと問われたら、彼はそのあたりにころがっている石ころをとりあげて、「これが例えば物質だ。これは石英であって、珪素と酸素から成る」と示すことができる。これにたいして汎心論者が「存在するのはすべて心をもつ」と主張するとき、こころとは具体的にこれだと示すことは全くできない。そもそも、そのあたりにある石ころにころがあるとするときのこころと、宇宙はこころに満ちていると嘆ずるときのこころと、人間のこころと言っているときのこころが同じものなのかどうかすらはっきりしない。それゆえ、汎心論者が、「存在するものにはすべて心がある」と主張するとき、その主張は、「存在するものはすべて尊い」とか、「存在するものは一つの例外もなく愛しい」といっているにすぎない。「だから自然環境は搾取されるべきではなく共感されるべきなのだ」と。これは信仰簡条であり価値判断である。このように汎心論は、願望としてしか、モラルとしてしか成立しえないのだ。

こころを具体的に定義すれば汎心論が立ち行かなくなること必定である。たとえば、こころを知・情・意を司る能力というように定義したならば、「川の流れやそ風も判断している」との主張は、あまりにメタフォリカルで

あって、その真偽を問題にすることは容易ではない。こころをいのちと定義したときに、石ころがいのちをもって  
いると主張するのはきわめてむずかしい。なぜなら、石ころは栄養活動しているようにはみえないし、子を生むよ  
うにもみえない。また石ころが死ぬというようなことは、さらに理解しにくいだろう。

ところがこころを意識ないし意識を成立させる機序（メカニズム）というように定義すると、汎心論はまんざら  
成立しないでもない。石ころは意識しているようにはみえないと主張したとき、「みえなくとも本当は意識してい  
るのだ」と言われたら、返すことばが無いだろう。ある意味で、汎心論の延命に力をかしているのは、このように、  
私秘性に基く不可知論である。汎心論は、この、哲学的論証のちよっとした隙、すなわち詰め切れない箇所にはび  
こるのだ。それゆえ、彼らの主張は哲学的議論の隙間（gap）を生きる場とするケチな思弁にすぎない。これが  
今日における汎心論の姿だ。

汎心論が王道を歩んでいるようにみえるのは、魂なるものの存在をだれも疑っていない時代のことだろう。「こ  
ころとは何か」などという流石的で罰当たりな問いをだれも思いつきもしない、そういうおおらかで信心深い時代  
にしか、汎心論は生き残れない。

## 十一 意識と脳科学

最近ではあたりまえのように、意識は脳だといわれる。しかしまた、少数ではあれ、脳科学は意識を解明できな  
いとの意見も聞かれる。これはどちらも正しい。重要なのはこの点をあいまいにしないことだ。脳科学は意識を研  
究しているわけではない。それが探究しているのはあくまで脳であって意識ではない。せいぜい言えても、脳科学



の対象は、意識が生じている際の脳の構造であり働きであり性質にすぎない。これは、現在の脳科学の現状から来る制約ゆえではない。脳科学は、それが客観的な探究であるかぎり、未来永劫そうなのである。脳科学はいずれ、意識が生じている脳の状態を今よりもっと詳しく正確に理解できるようになるだろう。しかしそれは、どこまで探究を続けてもあくまで脳の解明であって意識の解明ではない。もちろん、脳の解明が、意識のこれまでよくわかっていかなかった様々な側面に光をあてることにはなるだろう。そうであっても、それはあくまで脳の解明であって意識の解明ではない。意識は脳科学の対象ではないのだ。

では意識は哲学の対象だとしても言うのか。勿論そうだ。しかしこれは、哲学がとびっきり優れた学問であったり究極の真理を解明できる超絶科学だからではない。また意識が哲学だけが近づける超越論的なんとやらだからでもない。哲学は存在するもの一般を対象にするからである。脳科学が対象にできないものを哲学が対象にできるのはただそれだけのことだ。神だの数だの可能性だの正義だのを脳科学が対象にしないからといってだれも不思議におもうまい。それなのに、意識は脳科学の対象ではないというと、露骨に不満な顔をするのであれば、それこそおかしな話ではないか。結局、脳科学者が自分は意識を研究していると言っているとき、彼女ないし彼は、脳科学者としてではなく哲学者として発言しているのだ。あるいはむしろ次の様に言うべきかも知れない。脳科学は避けがたく哲学的でもあるのだと。この方がむしろ好ましかろう。事の本質を正確に表現しているのだから。

脳の解明は、被験者からの主観的報告がなければ決して意識の解明にならない。この点は重く受け止めたほうがいい。これは決して脳科学者の努力を蔑するものではない。意識の在り方を冷静に認めるべきだと言っているだけのことである。

(いとう はるき・東北学院大学教養学部教授)